九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# クニッゲ『人間交際術』における啓蒙批判と実用志向 : R.Z.ベッカーの民衆啓蒙運動と比較して

田口, 武史
松山大学

https://doi.org/10.15017/21886

出版情報：九州ドイツ文学. 24, pp.1-18, 2010-10-08. 九州大学独文学会
バージョン：
権利関係：

# クニッゲ『人間交際術』における啓蒙批判と実用志向

## ── R.Z. ベッカーの民衆啓蒙運動と比較して ──

田　口　武　史

### はじめに

A. F. v. クニッゲと、R. Z. ベッカー、この二人の著述家は共に1752年に生まれた。それぞれの主著である『人間交際術』[1] および『農民のための救難便覧』[2] が出版されたのも、同年の1788年のことであった。無論これだけでは、偶然の一致以上のものではないであろう。事実、それぞれの著作においてベッカーあるいはクニッゲの名前が登場する個所は見当たらない。[3] これまでに両者の関係性について積極的に論じた先行研究もない。

しかし『人間交際術』を『救難便覧』と比較すると、内容や動機においても様々な類似点、ないしは関連性が指摘される。すなわち第一に、共に生活の技術を具体的に伝授する実用書である点[4]、第二に同時代の社会的風潮、とりわけ啓蒙主義の現状に対する問題意識に根ざしている点、第三にクニッゲもベッカーも、その際あくまでも啓蒙家として啓蒙主義を内部批判し、是正しようとしていた点である。彼らは軌を一にして、日常の視点から新たな啓蒙のあり方を提唱した。その趣旨が広い読者層に歓迎された結果、クニッゲの名前は礼儀作法や処世術を取り扱う本の代名詞となり、ベッカーの『救難便覧』もまた ── その後数多く発行された類書が「…のための救難便覧」と名乗ったことにより ── このジャンルの代名詞となった。[5] 両者が、同時期に同じ特性を持った実用書を著し、しかも共に同時代人の間に大きな反響を巻き起こしたという事実は、何らかの必然性を有しているに違いない。この必然性を、クニッゲの『人間交際術』における批判的啓蒙観と民衆啓蒙家ベッカーのそれとを比較しつつ明らかにしてゆく。

### 1．似非啓蒙家に対する批判

『人間交際術』と『救難便覧』の間に認められる共通項とは裏腹に、クニッゲとベッカーの生涯は対照的である。女学校教師の息子として、すなわち下層市民として[6] 生まれ育ったベッカーは、少年時代から働いて家族を支えねばならなかった。一方のクニッゲは、男爵の家系に出自を持つにもかかわらず、父が遺した多額の借金を背負って自活の道を探ることを余儀なくされた。いずれも早くから独力で社会と渡り合わねばならなかった二人だが、その後の人生行路は明暗が分かれる。ベッカーが時代の上昇気流に乗って順調に成功を収めていったのに対して、クニッゲは貴族同士や秘密結社における人間関係のトラブルに幾度となく巻き込まれ、身の置き場を求めて遍歴を続けなければならなかったのであ

る。クニッゲは、貴族の生まれでしかも多方面の才能に恵まれながら、宮廷社会からつまはじきにされ、ようやく市民向けの著作に活路を見いだした。[7] ベッカーは、無位無官、貧困の中から身を起こし、新聞の編集と民衆啓蒙運動における活躍で、啓蒙市民の間でも一目置かれる存在となった。前者は上昇し後者は下降して、市民社会という同じ地平に立ったのである。したがってクニッゲとベッカーは、啓蒙主義時代のドイツという共通の対象を、それぞれ異なる文脈で眺めていたと言える。

彼らの経歴および社会的立場の違いに由来する相違がもっとも顕著に現れているのが、啓蒙に対する各々の評価である。ベッカーは、自らを押し上げてくれた啓蒙市民社会を、全面的に信頼していた。農民向けの本である『救難便覧』には執筆の意図や啓蒙とは何かについて理論的に説明する箇所はないのだが、どの部分をとっても、啓蒙が個人にも社会全体にも幸福をもたらすというベッカーの信念に満ちている。例えば『救難便覧』の第二部[8]に登場するヴィルヘルム・デンカーという作中人物の墓碑銘には、「より良くする、より良くなる、それがいつも、彼のこの世における喜びであった。今やヴィルヘルム・デンカーは、神の玉座の前でその報いを賜る」（N&HB, S.306）と刻まれている。「より良くする、より良くなる」という文句は、『救難便覧』のみならず、他の著作においてもベッカーが好んで使った、いわば民衆啓蒙運動のキャッチフレーズである。どんな人間にも生まれつき備わっている自己啓蒙の能力を発揮し、それぞれの立場で勤労に励み続けさえすれば、いつか必ず地上の幸福を手にし、社会にも益をもたらす、しかもそれは神の思し召しに適った行為であるがゆえ、天上の祝福も約束されている ── ベッカーの描くこのような啓蒙の世界は、我々には子供だましのユートピア思想としか思われない。しかしながらベッカー自身は、民衆の啓蒙を通してこの理想が実現することを、彼の上り調子の人生のなかで夢見ることができたのである。

では、宮廷貴族社会と市民社会の狭間をさまよい、成功と失敗の間を激しく浮き沈みしたクニッゲは、啓蒙をどのようにみていたのであろうか。確かに先行研究は例外なく、彼を啓蒙家と称している。彼の墓碑銘には「市民の友、啓蒙家、諸国民の師」（Bürgerfreund, Aufklärer, Völkerlehrer）と記されているところから判断すると、同時代人が彼を啓蒙市民の代表的人物と見なしていたことも間違いないであろう。ところがクニッゲは『人間交際術』の随所で、世間が啓蒙あるいは啓蒙家と見なしているものに対して辛辣な言葉を投げかけ、容赦のない攻撃を繰り返している。啓蒙家クニッゲは、なぜ他ならぬ啓蒙に対してことさら冷笑的な態度をとったのか。彼が啓蒙家であるならば、どのような意味でそうだと呼べるのかを検証する必要がある。

クニッゲは既に序論において、啓蒙家気取りの学者を痛烈に皮肉っている。

> ばかげた衒学者は、どんな所でも自分が大いなる地上の光として知られていて、それにふさわしい扱いを受けるものだと考えている。しかし、不幸にもそんな風に遇してもらえないことがあると、あるいはまた、啓蒙というこの大いなる光を授かろうと誰もがランプを手に参上するはずなのに、それを望まない人がいたりすると、ご機嫌斜

めになってしまうのだ。（Umgang, S.22）

また同じく序論で彼は、自分はかつて「選りすぐりの最も啓蒙された人々」との交際を試みたことがあったが、彼らの正体は見かけ倒しの「権力を握った愚者」（Umgang, S.35）に過ぎず、何ら得るところがなかったと述懐している。身分の高い人々との交際で辛酸を舐めてきたクニッゲが、啓蒙と権威を取り違えた振る舞いを、否、むしろ啓蒙が権威となっている風潮を批判するのは自然なことであろう。

第３部８章の１節から３節に渡って秘密結社の有害性を指摘し、徹底的に否定する箇所にも、クニッゲの実体験が反映されている。クニッゲは立身のために宮廷社会における社交儀礼に馴染もうと努めたが、そのぎこちない態度が他人の信頼も、自分自身の尊厳も損なうことになると気付いた。彼が秘密結社に活躍の場を求めたのは、それゆえである。貴族の流儀に従わないことは宮廷での出世を断念することを意味していたが、それでもクニッゲは、もっと自由で内実の伴った人間関係の方を選んだのである。

とりわけ1780年に加入した啓明結社（Illuminatenorden）において、彼は精力的に活動した。すなわち、ドイツ各地にあった各種の秘密結社ロッジを吸収合併し、啓明結社の規模を飛躍的に拡大させ、また首脳陣としてこの結社の組織改革も進めようとした。ところがその辣腕がかえって仇となり、創設者 A. ヴァイスハウプトに疎まれるようになってしまったのである。結局、クニッゲが啓明結社に寄せていた期待は完全なる失望に変わり、四年あまりで会を去ることになった。[9] この顛末は、彼が九年前にカッセルの宮廷を追い出されたときの経験と選ぶところがなかった。当地で工場や農場の経営において成功を収め、社交界の花となった彼は、まさにそれゆえに同僚貴族に妬まれ、宮廷での居場所を失ったのである。そうした権謀術策が渦巻く宮廷社会と同様の派閥争いが、秘密結社内部の交際でも繰り広げられているのは、クニッゲにはいかにも愚かしく、そして危険に思われた。

> 〔……〕歪んだ考えの持ち主や卑劣漢は、これ〔結社員は上層部に盲従しなければならないこと〕につけ込み、知られざる上層部の名で、私的な目的のために他の結社員を悪用するようになる。世人は誰しも情念を持っているもので、この情念を結社の中に持ち込んでしまう。すると情念は、秘密主義というマスクに隠された暗がりの中で、日の光に照らされたところよりも、もっと好き勝手に動き始める。どんな秘密結社でもいつの間にか会員の人選がいい加減になり、そうしてだんだん堕落してゆくのだ。〔……〕秘密結社は、あらゆる種類の政治的、宗教的、哲学的熱狂を助長する。彼らのもとでは、修道士のような身内意識がはびこり、それが災いをもたらす。（Umgang, S.392f.）

この引用箇所で注目すべきは、クニッゲが秘密結社の理想や目的に異を唱えているのではなく、秘密結社の組織としてのあり方、すなわちその秘密主義と排他主義を取り沙汰し

ている点である。確かに秘密結社の閉鎖性は、当時の政治体制においては実現しがたい平等な交際や自由な発言を、限定的にでも可能にするために必要であった。[10] しかし、実際そこで行われているのは「大抵ひどく些細なことや、ばかげた儀式にかかずらい、いかようにも解釈可能な比喩言語で話す」(Umgang, S.392) ことに過ぎないと、クニッゲは暴露する。

「儀式」や「比喩言語」は、それらによって構成される結社を完結した一個の仮想現実の社会として成立させる。ところが結社に所属する人間が、現実社会における「情念」を捨て去ることができないために、本来新しい精神的態度が醸成されるべき言論空間において、外の世界と同様の旧態依然たる人間関係と軋轢が繰り替えされる。それどころか、宮廷の場合と同じく世間の目が届かない「暗がり」では、「情念」の放埒には歯止めがきかなくなってしまう。それゆえどんなに高邁な理想を掲げた組織であっても ── それを構成するのが「情念」を抱いた生身の人間である限り ── 組織の閉鎖性は堕落の温床となるだけである、とクニッゲは断ずる。同じ理由で彼は、閉じられた秘密結社の「暗がり」で、公の啓蒙を目指すというのは根本的な矛盾であるとする考えを示す。

> 一人一人の人間が、より早く啓蒙の時代を到来させようとしたところで、まったく無益だ。事実そんなことはできようはずもない。たとえそれが可能だとしても、公然と活動する義務がある。そうすることによって、自分の国や他の地域に住む他の分別ある人々が、啓蒙家の使命について、彼らが売り出す知的商品の価値について、彼らが教えているものが本当に啓蒙なのか、ひょっとすると彼らは自分たちが誹るそれよりも、もっとひどい悪貨を鋳造しているのではないか、こうした事柄について判断できるようになるかもしれない。だからこそ、公然と活動することが義務なのだ。(Umgang, S.392)

クニッゲが秘密結社に対して「公然と」öffentlich 啓蒙活動を行うよう要求したことは、カントが「啓蒙とは何か、という問いへの回答」で提示した、「理性の公的使用」der öffentliche Gebrauch der Vernunft の要求と完全に合致する。カントの理論を援用すれば、秘密結社内部で来るべき啓蒙社会へ向けて準備が進められているとしても、それはまさに「理性の私的使用」なのであり、社会全体の啓蒙に寄与しないことになる。[11] 秘密結社が取り組む啓蒙は、その閉鎖性を打ち破らない限りはまがい物である、というのがクニッゲの主張である。

さらに第3部5章6節は、ジャーナリストを似非啓蒙家として非難する内容となっている。彼はここで、「ある流行語の類い、たとえば啓蒙、公開、思想の自由、教育、受忍、唯一至福を授ける信仰、イエズス会の信仰、カトリックの信仰、ヒエラルキー、より高き学問、磁気療法などといった言葉をしょっちゅう口にしている」(Umgang, S.345) 匿名ジャーナリストに用心するよう助言している。『人間交際術』第三版の序文や注においてクニッゲは、初版発行以来この作品に寄せられた無理解な書評に度々抗弁しているのだが、

それもまた、匿名という閉鎖性に対する反感に基づいている。彼は、「啓蒙、公開、思想の自由」を唱える際に自分の名を名乗らないジャーナリストに、秘密裡に行われる啓蒙と同じ欺瞞を看取する。啓蒙市民の典型たる新聞や雑誌の記事執筆者が、深く意味を考えることもなく流行のキーワードを得意になって吹聴している、その姿にクニッゲはドイツ啓蒙主義の実情を見ていた。

ただし、これらの批判は決して啓蒙思想そのものに対してではなく、啓蒙の担い手を僭称するエピゴーネンに向けられたものである。『人間交際術』の主眼は、様々な身分、性格、志向を有する相手との交際を、柔軟かつ効果的な振る舞いで上手にこなしてゆく術を提案することにある。その目的に照らせば、交際を円滑に進めようとしない相手の語る啓蒙は、たとえその人物に権威があったとしても、信ずるに足らない。『人間交際術』においては、啓蒙も人間関係に益をもたらすか否かでその真偽が判断されるのである。

## 2．啓蒙そのものに対する反感

しかしクニッゲの啓蒙批判が、似非啓蒙家個人に留まらず、ドイツ啓蒙主義全体の思想傾向にまで到達している箇所も多い。宗教が話題になった際の振る舞い方を説く第１部１章31節で、クニッゲは他人の信仰を迷信と決めつけあざ笑う人に対して「我々が啓蒙と呼んでいるものが、他の人にはひょっとすると暗黒化（Verfinsterung）に思われるかもしれない、ということを忘れてはならない」（Umgang, S.53）と警告している。啓蒙主義はあらゆる迷信に対して戦いを挑んできたのだが、その一途な姿勢が見方によっては迷信的な態度なのかもしれないというのである。確かに合理主義思想を説く啓蒙家たちの多くが、同時に秘密結社に所属し、また催眠療法や降霊術などのオカルティズムに傾倒していたのだが、クニッゲの指摘はそうした啓蒙主義時代の裏面を突いているのではない。

> しかし私にはこう思われる。今日人々は、宗教について語る機会を意識的に避けることが多いのではないか。自分が十分に啓蒙されていないと思われるのを恐れて、熱っぽく神の礼賛を示すことを恥ずかしがる人々もいれば、他方では信心ぶった人々から気に入られるために宗教心を持っているかのように装い、宗教的熱狂に敵対することを決して口にしないよう用心する人々もいる。前者は人間恐怖症であり、後者は猫かぶりである。いずれにせよ、どちらも誠実な人間と呼ぶに値しない。（Umgang, S.54）

啓蒙家を自認する人々が、自分の中にある非合理な感情を隠蔽するために他人の信仰心を嘲笑う、この臆病で卑屈な態度こそクニッゲの批判対象である。その一方でまた、「宗教的熱狂」が啓蒙精神に反することを認識しながら、その批判的態度を他人に悟られないように努める人も、クニッゲは認めない。彼が認めるのは、「誠実な人間」のみである。「誠実な人間」とはすなわち、「ある種のしなやかさ、社交性、譲歩、忍耐、時宜に適った否

認、激情を押さえつける力、自分自身に対する注意深さ、常に安定した心情の明朗さ」（Umgang, S.24）という特長を備えた人間である。また「少なくとも自分より優れた人々に正当に遇してもらうこと、誰からも軽蔑されないこと、他人から安らぎが与えられてあること、そっとしておいてもらうこと、あらゆる階級の人間との交際に楽しみを見出すこと、他人から悪用されたり、かつがれたりしないこと」（Umgang, S.406）を望んでいる人間である。『人間交際術』が目指すのは、交際におけるこのような態度および技術の習得である。他者に対して寛容に振る舞い、円満な人間関係を構築するには、自己が確立していなければならない、逆に自己が確立していれば、考え方の異なる他者をも受け入れることができ、しかも他者の考えに動じることもないのである。

これに対して、当時の多くの啓蒙家は寛容を是としながらも、実際は自他の非合理な心情を認めることを憚った。その矛盾した態度は、決して個々人の啓蒙の不足に起因しているのではなく、啓蒙主義に内在する理性信仰が端的に現れたものである。啓蒙家たちは、合理的に説明できないものを徹底して拒否しようと試みた。その意識の強さを逆説的に証明しているのが、秘密結社、あるいは神秘主義への傾倒である。なぜなら、もし非合理な心情を是認できるのであれば、「秘密主義というマスクに隠された暗がりの中で」活動しなければならない必然性はないからである。クニッゲにとって、秘密結社の構成員が「情念」を持ち続けていることも、啓蒙の時代に「宗教的熱狂」を胸に抱くことも問題ではなかった。そうではなく、ある種の心情をひた隠しにし、また隠れてある種の心情を解放する、その不自然で姑息な態度を突いたのである。

さらにクニッゲは、若者に老人と付き合う際の心得を説く第２部１章５節で、「我々の、先入見がさっぱりと洗い落された啓蒙の時代においては、生まれつき我々に刻み込まれている感性の数々が理屈で排除されてしまう」（Umgang, S.141）と、当世の若く博識な啓蒙家たちが老人に対する敬意を失い、生意気に論駁する様に眉をひそめる。先入見の払拭は啓蒙主義の最重要課題であった。[12] ところが啓蒙の要請に従って先入見を捨て去った結果、人間として本来持っているべき感性までも失いつつあるのではないか、とクニッゲは危惧する。人々の先入見を一掃してしまうことの危険性は、ドイツ啓蒙主義の本山とも言うべき「ベルリン水曜会」のメンバーたちによって既に指摘されていた。[13] とはいえ彼らが問題としていたのは、未だ啓蒙されていない人々が有する先入見の可否であった。そして彼らは、いわば必要悪としてある程度の先入見を受忍すべきだと判断した。これに対してクニッゲは、啓蒙を遂げた（と自惚れている）人々が、交際の相手に対する思いやりを失っていることを憂う。老人に対する敬意までも先入見であるかのように拒否することは、彼にはあまりに教条的に思われた。そこでまだ四十歳前の彼は、敢えて老人のような口調で「私はそれほどまでの啓蒙に到達できなかった。それゆえ、私がこの本であえてかなり古くさい決まり事をいくつか提供したとしても、どうかご容赦願いたい」（Umgang, S.141）と述べる。『人間交際術』は、決して合理主義一辺倒の啓蒙主義を旨としているわけではないと宣言したのである。

以上の批判に表れているのは、人間同士の自然な交情を軽視する啓蒙主義の独善的で不

寛容な側面[14]に対するクニッゲの不快感であった。第２部２章１節ではこうした態度が国家に及ぼす悪影響についての言及も見られる。

> 祖国愛とは確かに複合的な感情ではあるが、──早くから市民社会を追放され、山師として国から国へと渡り歩き、財産も市民的義務感も持たない人でない限り──世界市民精神よりは、まだ親密で温かいものに思われるものだ。乳を与えてくれた母親を愛さない人、子供時分に無邪気で幸福な日々を、楽しく安心しきって過ごした野原を目にして胸が熱くならない人、そんな人はすべての物事に対して一体どんな関心を持っているというのだろうか。財産やモラル、人間にとってこの世でなにか大切に思えるもののすべては、結局のところ家族と祖国の絆が維持されているからこそ価値があるのではないか。
>
> しかしこの絆が日々弱くなってきていることは、我々が自然およびその掟という尊い秩序から日々遠ざかっていることの証に他ならない。（Umgang, S.146）

このようにクニッゲは、過度の啓蒙によって人間同士の結びつきが弱まり、それがモラルと社会秩序の崩壊を引き起こすことになるのではないかと、強く危惧していた。熱狂家や夢想家との交際法を扱った第１部３章26節でも、「世界の幸福、自由、平等、人権、文化、万人の啓蒙、教養、世界市民精神」という、この時代の知識人が書いた文章であれば必ずと言ってよいほど登場してくる用語を並べて「中身のない言葉」と一刀両断にするとともに、これらの用語によって構成される思想体系は、空疎であるにもかかわらず「国家に一番混乱をもたらしうるものであり、しかも一番魅惑的に見える」（以上 Umgang, S.126）のだと、その政治的危険性を指摘する。啓蒙思想の核概念たる「世界市民精神」であっても、それが人間関係を希薄にして、社会を無意味に動揺させるだけの概念であるならば、クニッゲの判断ではいかがわしい大言壮語と見なされる。交際術においては、見栄えのする概念よりも、「祖国愛」や「家族」への思慕という感情の方が遙かに重みがある。[15] 間もなく到来するロマン主義の時代には、こうした感情の前で啓蒙思想の謳い文句がすっかり色褪せてしまうことを考えると、クニッゲの啓蒙主義批判は、時代の変化を告げるものであったと見なしうるであろう。

## ３．民衆啓蒙運動に対する態度

上の引用箇所にあった「万人の啓蒙」allgemeine Aufklärung とは、これまで啓蒙の埒外にあった下層階級を啓蒙する試み、すなわち民衆啓蒙運動を指す。クニッゲは、民衆啓蒙に対しても批判の矛先を向けているのである。[16] 人道的で啓蒙の本義にも適っているはずの「万人の啓蒙」が社会にもたらす「悪影響」を、彼は次のように予見している。

> 幸運なる十八世紀よ、〔……〕万能薬の、真理愛好者の、汎愛主義者の、錬金術師

の、世界市民の世紀よ、お前は私たちを一体どこへ連れて行こうとしているのか。私の目に浮かぶのはこうだ。万人の啓蒙がすべての身分に行き渡る。農民が自分の鍬をほったらかしたまま無為に過ごし、領主に対して諸身分の平等について、生活の重荷を皆で背負う義務について講釈をたれる。誰もが自分にとって具合の悪い先入見を、理屈を言って退ける。法律や市民の制度が恣意に屈服する。人より賢い者、強い者が、自分の生得の支配権を申し立て、全世界のためと称して、自分の仕事のために自分より弱い者たちを犠牲にする。所有権も憲法も国境も消える。誰もが自分自身の政府となって、自分のために自分の欲求を満たす体系を発明する。(Umgang, S.146)

しかもクニッゲは、民衆の啓蒙は社会の安定にとってだけではなく、民衆自身にとっても不利益を生ずるのだと主張する。

低い身分に生きる定めを負った人々に、過度の文化と啓蒙を求めるものではない。また彼らの知的能力に余るものを要求し、知識を豊かにしようと努めてはならない。知識は、下層階級の人々に、自分の境遇への反感を引き起こし、自分の身分や必要性に見合った仕事をつらく感じさせるのだ。啓蒙という語は現代において非常に誤った使い方をされており、精神の改良というよりも、むしろ妄想めいた、思弁的な、空想的な玩具へ向かう精神的啓蒙を意味している。悟性の最高の啓蒙とは、我々に自分の境遇に対する満足を覚える術を、自分の置かれている境遇において役に立ち、益をもたらし、目的に適った働きをする術を教えるものなのだ。それ以外はみな蒙昧であり、堕落へ導くものだ。(Umgang, S.311)

これは一見、民衆啓蒙運動に対する直接的非難として受け取られるような発言である。クニッゲが――民衆啓蒙運動の主導者たるベッカーの著作、特に1785年に発表された民衆啓蒙運動の趣意書『農民啓蒙試論』[17] を読んでいたかは定かではないが――次第に世論を形成しつつある民衆啓蒙の動きに警戒感を強めていたことは、この箇所から明確に伝わってくる。とはいえ、クニッゲの批判はベッカーの民衆啓蒙運動には全く該当しない。なぜならベッカー自身は、民衆の啓蒙によって身分制に立ち向おうとしたのでも、農民に学問をさせようとしたのでもないからである。『農民啓蒙試論』の次の箇所でベッカーは、上に引用したクニッゲの発言ときわめてよく似た見解を示している。

広範な知識や、重層的な諸理念、そして全体の高度な俯瞰は、国民のうち天然の産物、人工の産物の生産に従事すべき者を、あるときは、彼らの生業にとって不可欠なごく些細な物事への注意力を阻害し、またあるときは、あまりにも頻繁に現実の世界から空想の迷い道へと誘惑してしまうことが明らかだ。(Versuch, S.37f.)

ベッカーは『農民啓蒙試論』の中で、世間の人々が、なかんずく少なからぬ知識人が啓

蒙の目標を「学識」と「洗練」に見ていることを全くの誤りだと否定し、真の啓蒙とは実生活に役立つ知識を獲得し、それを広めてゆく営為であり、あらゆる人にとって実現可能かつ有益でなければならないと主張する。この理念を実現させるために書かれたのが『救難便覧』である。農民が農民として生きて幸福を得るのに必要十分な知識を与えることが、彼の民衆啓蒙運動の狙いであった。この思想運動でベッカーが実際に試みたこと、あるいは避けようとしたことは、次に示すクニッゲの要求とほとんど完全に一致している。[18]

> 実証よりも実例によって、耕作や家政の仕方に関する父祖伝来の先入見の数々を徐々に捨て去るよう農民を仕向ける試み、目的に適った学校の授業を通して、ばかげた妄想、愚にも付かない迷信、幽霊や魔女といったものの存在を信じていること、これらを打破せんとする努力、農民に読み書き算術を教えること ── これは賞賛に値し、有益だ。しかし彼らに、様々な本や、物語や、寓話をこっそりと渡すこと、観念の世界に身を置く癖を付けさせること、どうしても改善され得ない自分の哀れな境遇に目を開かせること、過剰な啓蒙によって自分の置かれた立場に対して不満を感じさせ、農民を富の不平等な分配について熱弁をふるう哲学者にしてしまうこと、彼らの習俗に如才なさや、うわべだけ繊細な礼儀作法をあたえること[19] ── これは、実に役に立たないことなのだ。（Umgang, S.380f.）

『人間交際術』の中で望ましい啓蒙について具体的に語られるのは、ほとんどこの箇所のみ、すなわち農民の啓蒙に関してのみである。クニッゲは、適切な啓蒙によって下層階級を哀れな境遇から救い出すことが焦眉の課題であることを認めている。そもそもこの作品が、農民や従僕を一個の人格を持った「人間」と見なし、しかるべき「交際術」をもって遇する方法を指南していること自体が、民衆啓蒙に対するクニッゲの本質的共感を物語っているであろう。彼の民衆啓蒙に対する態度は、ベッカーのそれと通底する。一貫した啓蒙批判にもかかわらず、クニッゲが啓蒙家であるとするならば、それは、彼が民衆の生活に役立つ、修正された啓蒙を要求したからに他ならない。

> かくも圧迫されながら、かくも重要で有用な階級の負担の軽減に、なにがしかでも寄与できるという僥倖を神の配剤によって与えられた人、おお、その人は農民の小さな茅屋に喜びを広げたという甘い歓喜を、その人の名が子から孫へと祝福をもって語り続けられるという甘い歓喜を享受するがよい。（Umgang, S.380）

こう語るときのクニッゲの口調は、自称啓蒙家の救いがたい俗人根性に苛立つ時の口調と比べて、なんと同情に満ちていることであろうか。これまで取り組まれてきた啓蒙は、人間同士の交際において害にはなっても益となることは少なかった、クニッゲは基本的にそのように認識していた。それでもなお彼は、未だ啓蒙の対象となっていない農民たちに対しては、従来とは異なる啓蒙が実現されることを期待した。自分の置かれた立場を柔軟

に受け止め、その上で生活圏に改善をもたらす開かれた態度を育む、それが彼の考える真の啓蒙であった。

クニッゲは『人間交際術』において、固定化し空疎になった社交儀礼を排し、目的に即して振る舞う術を、様々な交際相手や状況の分析に基づいて指南した。一方ベッカーは『救難便覧』において、農民が日常生活で遭遇する様々な困難に対し、常に改良の意識を持って、いちばん安全で確実な方法で切り抜ける技術を伝授した。両者に共通する理念とは、実用性である。実用本位であるからこそクニッゲとベッカーは、既に権威を手にして名目と化した啓蒙主義に対して異議を唱えねばならなかったのである。啓蒙批判、誠実な交際術、そして民衆啓蒙は、実用性を共通理念として互いに連関している。クニッゲもベッカーも、市民社会を乱すような民衆啓蒙や身分制を基盤とした社会構造を根本的に変化させる意志は皆無であったが、それもまた、安定した世の中でこそ人々は真の啓蒙を実現しうるという、彼らの実用志向に即した態度であった。このように考えると、ドイツ啓蒙主義が最終段階を迎えた時期に、それまでの啓蒙主義を修正する意図を持った二冊の書物が、どちらも実用書の形態で足並みをそろえるように世に現れたのは、決して偶然とは言えないであろう。

## 注

本稿は、日本独文学会平成21年度年度秋季研究発表会（名古屋市立大学）における口頭発表の原稿を、大幅に加筆修正したものである。

なお改稿の際に、平成22年－24年度科学研究費補助金若手研究（B）「ドイツ民衆啓蒙運動による文化革命 ── 〈Volk〉と民衆文学の価値転換 ── 」（研究代表者・田口武史、研究課題番号22720138）による資料を用いた。

1）Knigge, Adolph Freiherr von: *Über den Umgang mit Menschen*. Frankfurt a.M. 2008. 本書からの引用は、引用の直後の括弧内に（Umgang, 頁数）の形式で示す。

2）[Becker, R.Z.]: *Noth- und Hülfsbüchlein für Bauersleute oder lehrreiche Freuden- und Trauer- Geschichte des Dorfs Mildheim. Für Junge und Alte beschrieben*. Gotha 1788. Nachdruck der Erstausgabe von 1788. Hg. von Reinhart Siegert. Dortmund 1980. 以下『救難便覧』と略記する。この作品からの引用箇所は、直後の括弧内に（N&HB, 頁数）の形式で示す。

3）両者の経歴および著作については本稿の末尾に添付した年譜を参照。

4）ただし『人間交際術』が市民を中心とする読者を対象とした（広義の）作法書であるのに対し、『救難便覧』は農民を対象とした物語風生活指南書である。『救難便覧』は、農作業や食生活の改善策、共同体における望ましい人間関係、様々な災難の対処法などを、例話を通して提供している。『救難便覧』の詳細については、拙論「教養人による『民衆』の発見 ── 啓蒙主義末期の民衆本『農民のため

の救難便覧』について ──」（日本独文学会西日本支部編「西日本ドイツ文学」第15号、2003年、1-12頁）を参照。

5）『救難便覧』は最終的に百万部以上が出版され、十八世紀ドイツ最大のベストセラーとなった。『人間交際術』も、初版出版の数ヶ月後に第二版、1790年の初めには第三版が出る程の人気を博した。現在もなおクニッゲの名前を冠した実用書が毎年のように出版されているのだが、その多くは単に日常生活のノウハウを説くだけのものであり、オリジナルの『人間交際術』とはほとんど無関係の内容になっている。鋭い人間観察と同時代批判を特徴とするクニッゲの『人間交際術』は、むしろ宮廷の作法に代表される形式的な社交儀礼を否定した。ところがクニッゲの死後の十九世紀に、この作品は杜撰なやり方で再編集され、いわば棘を抜かれた簡略版として出回るようになった。これにより、上品な振る舞いの秘訣を説く作法書という、皮肉にもクニッゲの意図とは正反対のイメージが定着してしまった。Vgl. Raabe, Paul (Hg.): »... *in mein Vaterland zurückgekehrt« Adolph Freiherr Knigge in Hannover 1787-1790*. Göttingen 2002, S.48; Göttert, Larl-Heinz: »*Über den Umgang mit Menschen*«. In: Heinz Ludwig Arnold (Hg.): *Adolph Freiherr Knigge. TEXT ＋ KRITIK*. München 1996, S.30f.

6）十八世紀末ドイツにおける下級教師の待遇について、および学校関連法規については次を参照。ロヒョウ『国民性と教育』田中昭徳、金子茂訳、明治図書出版、1965年、174-179頁（訳注14、15）。

7）クニッゲの著作活動は、書評、小説、戯曲、紀行文、翻訳、政治パンフレットなど多岐にわたる。もっとも彼は、創作衝動に駆られて文章を書き始めたというよりも、生活してゆくために文筆家となったらしい。秘密結社の活動にのめり込んでいた彼は、仕官の道を半ば諦め、文士として生活の糧を得る道を選んだのである。その文学的名声は『人間交際術』や『ブラウンシュヴァイクへの旅』などの成功によって高まっていったものの、実生活においては不安定な日々が続く。ようやくブレーメンで官職を得て、経済的、社会的に安定したのは、彼が四十三年という短い生涯を閉じる六年前のことだった。

8）『救難便覧』の第二部は、ヴィルヘルム・デンカーが領主の見聞旅行に同行した際の手記のかたちをとっている。デンカーは、ドイツ各地で新しい耕作方法や農機具の知識（クローバー栽培による土壌改良法や頑丈な馬鍬の作り方など）を集め、また旅先で知り合った様々な身分や職業を持つ人々の生活から、社会が分業と相互扶助によって成り立っていることを理解した。やがて帰郷した彼は、蓄積した知識を日常生活の中で実践することにより、次第に家政を豊かにして行く。『救難便覧』はこのように、農民が如何にして日々の農作業を通して生活を改善できるかを、きわめて具体的な情報とともに物語の形式で読者に伝える。

9）クニッゲの秘密結社への関与、啓明結社での活動およびA. ヴァイスハウプトとの対立については、以下の論文に詳細な記述がある。Dittberner, Hugo: *Der gute*

*Herr aus Bredenbeck*. In: Heinz Ludwig Arnold（Hg.）, a.a.O., S.4f.; Neugebauer-Wölk, Monika: *Debatten im Geheimraum der Aufklärung. Konstellationen des Wissensgewinns im Orden der Illuminaten*. In: Wolfgang Hardtwig (Hg.): *Die Aufklärung und ihre Weltwirkung*. Göttingen 2010, S.17-46 ; 斎藤太郎「秘密結社員との交際について ── アドルフ・フライヘア・クニッゲにおける『啓蒙と秘密』（I）、（II）──」（慶應義塾大學藝文學會編「藝文研究」第64号、1993年、（86）-（101）頁、および第66号、1994年、（1）-（18）頁）。なお、ベッカーもまたゴータの秘密結社に所属していたのだが、具体的にどのような活動を行ったのかは詳らかになっていない。なお、秘密結社の活動を通して両者が顔を合わせた可能性は否定できないが、論者の知る限り、その決定的証拠となる文献は見出されていない。

10）ただし、ルートヴィヒ・ホフマンがコゼレックやフュレによる解釈に反論して指摘しているように、ドイツの秘密結社には君主や貴族も加入していたのであり、それゆえ市民階級が身分制国家を転覆させるという政治的野心を隠すために作った組織であったとは言えないであろう。この点は、（本稿で言及する）下層階級の啓蒙に対するエリート市民たちの拒否感を考察する際に重要な視点である。シュテファン・ルートヴィヒ・ホフマン『市民結社と民主主義　1750－1914』山本秀行訳、岩波書店、2009年、21－38頁参照。

11）Vgl. Kant, I［mmanuel］: *Beantwortung der Frage: Was ist Aufklürung?* In: *Was ist Aufklärung? Beiträge aus der Berlinischen Monatsschrift*. Eingeleitet und mit Anmerkungen versehen von Norbert Hinske. Darmstadt [4]1990, S.452-465.

12）例えば、J.K.W. メーゼンによる「ベルリン水曜会」の活動方針案「同胞市民の啓蒙のために何が必要か」の第三項に、先入見の根絶が啓蒙の重要課題としてあげられている。Vgl. Keller, Ludwig: *Die Berliner Mittwochs-Gesellschaft. Ein Beitrag zur Geschichte der Geistesentwicklung Preussens am Ausgang des 18. Jahrhunderts*. In: ders. (hg.): *Monatshefte der Comenius-Gesellschaft*. Band V.（1896）Heft 3 u. 4, S. 73-76.

13）「ベルリン水曜会」のメンバーは、啓蒙の前提条件となる言論・出版の自由について集中的に議論したのだが、その際、非知識人にどの程度知識を与えるべきかがひとつの争点となった。非知識人に正しい知識を与えたとしても消化不良を起こして逆効果になる、という見解が大勢を占めた。この議論については、拙論「プロイセン・アカデミー懸賞論文課題『民を欺くことは有用であり得るか？』── R.Z. ベッカーの民衆啓蒙とドイツ啓蒙主義者の自己規定 ──」（日本独文学会西日本支部編『西日本ドイツ文学』第20号〔2008年〕、11-24頁）を参照。

14）次の箇所にも、啓蒙主義の衒学的傾向と冷淡さを批判するクニッゲの意図が読み取られる。「確かに我々の最近の哲学は、この〔隣人や同居人という〕密な人間関係を省略してしまうのだが、そんなことをするほど、私は十分に啓蒙されてはいない。それゆえ、確信を持ってこう書きつけるのだ。あなたは、自分の家族の次には、まず隣人や同居人に対して助言や行動、援助を行う義務があるのだと。」

（Umgang, S.234）

15）同様の見解が、（有名な「『啓蒙とは何か』という問いへの回答」をカントが執筆する直接の契機となった）J.F. ツェルナーの論文「宗教による婚姻認証を今後行わないことは、賢明か」（Zöllner,［Johan Friedrich］: *Ist es rathsam, das Ehebündniß nicht ferner durch die Religion zu sanciren?* In: *Was ist Aufklärung?* S.107-116）にもある。従来の研究において、啓蒙主義と愛国心ないしナショナリズムとの関係は十分検討されてきたとは言い難いが、1780年代のドイツ啓蒙主義、とりわけ「啓蒙とは何か」を巡る議論と民衆啓蒙運動において、この問題は決定的に重要である。特に次の文献を参照されたい。Vierhaus, Rudolf（Hg.）: *Deutsche patriotische und gemeinnützige Gesellschaften*. München 1980; Böning, Holger: *Das „Volk“ im Patriotismus der deutschen Aufklärung*. In: Otto Dann / Miroslav Hroch / Johannes Koll（Hg.）: *Patriotismus und Nationsbildung am Ende des Heiligen Römischen Reiches*. Köln 2003, S.63-98; Siegert, Reinhart: *Das Volksbegriff in der deutschen Spätaufklärung*. In: Hnno Schmitt / Rebekka Horlacher / Daniel Tröhler（Hg.）: *Pädagogische Volksaufklärung im 18. Jahrhundert im europäischen Kontext: Rochow und Pestalozzi im Vergleich*. Bern / Stuttgart / Wien 2007, S.32-56; 寺田光雄『民衆啓蒙の世界像 ── ドイツ民衆学校読本の展開 ──』ミネルヴァ書房、1996年。なお、ベッカーの作品におけるナショナリズムについては、次の論文にまとめた。拙論「R.Z. ベッカーの民衆啓蒙運動における政治意識 ── フランス革命以前・以後 ──」（「松山大学言語文化研究」第29巻２号〔2010年〕、229-252頁）

16）中直一「社交術と啓蒙 ── クニッゲ『人間交際術』にみられる処世と啓蒙の関係 ──」（大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科「言語文化共同研究プロジェクト2001　ドイツ啓蒙主義研究２」25-37頁）参照。

17）Becker, R.Z.: *Versuch über die Aufklärung des Landmannes. Nebst Ankündigung eines für ihn bestimmten Handbuchs*. Dessau und Leipzig 1785. Neudruck der Erstausgabe, mit einem Nachwort von Reinhart Siegert. Stuttgart/Bad Cannstatt 2001. この作品からの引用箇所は、（Versuch, 頁数）の形式で示す。

18）ただし農民の「読み書き算術」の能力について、ベッカーは『救難便覧』の中で何も言及していない。その点では、ベッカーの方がクニッゲよりも保守的な考えを持っていたと言える。また本論で用いた『人間交際術』のテクストは第三版（1790年）であるため、クニッゲが『救難便覧』を読んだ後でこの箇所を書いたのか、あるいは偶然の一致なのかを判断するには、なお調査が必要である。

19）ベッカーは『農民啓蒙試論』において、礼儀作法に関しても次のようなクニッゲと驚くほど良く似た見解を述べていた。「型にはまった礼儀作法、洗練された態度や表向きの恭しさが、友情と共感における互いの思いやりや心情の吐露に取って代わる。本性と人徳の美に対する感性に代わって、学び覚えた、わざとらしくも美的かつ道徳的な決まり文句が支配するようになる。」（Versuch, S.42）

## 年　　譜

| | Knigge | Becker |
|---|---|---|
| 1752年 | ハノーファー近郊のブレーデンベックに貴族（男爵）の息子として生まれる。 | ゴータに女学校教師の息子として生まれる。 |
| 1766年 | 父の死。父の残した多額の借金を背負うこととなる。クニッゲは生涯この借金の返済に苦しんだ。 | |
| 1769年 | ゲッティンゲン大学に入学（法学専攻）。 | |
| 1770年 | | イエナ大学に入学（神学専攻）。 |
| 1771年 | カッセルの宮廷に仕える。 | |
| 1772年 | | 父の死。大学を中退後、家庭教師となる。 |
| 1773年 | カッセルのフリーメーソン・ロッジ Zum gekrönten Löwen に加入。 | |
| 1775年 | カッセルの宮廷を去る。その後1777年までの間、ベルリン、ダルムシュタット、ゴータの各宮廷に仕官を試みるが、いずれも失敗。 | |
| 1777年 | ハーナウの宮廷に滞在。宮廷で愛好家による劇団を組織、劇作と作曲を手がける。しかし、有給の官職は得られなかった。 | |
| 1779年 | F. ニコライ編集の雑誌『ドイツ百科叢書』に書評の寄稿を始める。 | |
| 1780年 | フランクフルトに転居、啓明結社に加入、A. ヴァイスハウプトに次ぐ第二の実力者となる。 | フリードリヒ２世が提案したプロイセン・アカデミー懸賞論文「民を欺くことは有用でありうるか」で一等を受賞（原文はフランス語）。 |
| 1781年 | 『我が人生のロマーン』（～ 1783年） | 懸賞受賞論文をドイツ語に翻訳して出版。 |
| 1782年 | | バーゼドが設立したデッサウ汎愛学校の教師に任用される。汎愛学校の機関誌「青少年とその友のためのデッサウ新聞」を創刊、編集。ゴータのフリーメーソン・ロッジに加入。 |
| 1783年 | 『ペーター・クラウゼンの物語』（～ 1785年） | デッサウ汎愛学校を去る。 |
| 1784年 | 啓明結社を脱退。ハイデルベルクへ転居。 | 「ドイツ新聞」を自己資本で創刊する。 |

| | | |
|---|---|---|
| 1785年 | | 『農民啓蒙試論』 |
| 1786年 | 『秘密結社の最新の歴史に関する九つの話』 | |
| 1787年 | ハノーファーに転居、『哲学者の混乱、或はルードヴィヒ・フォン・ゼールベルクの物語』 | |
| 1788年 | 『人間交際術』 | 『農民のための救難便覧第一巻』 |
| 1789年 | 『哀れなフォン・ミルデンブルク氏の物語』 | |
| 1790年 | ブレーメンでハノーファー宮廷の官職を得る。当地の大聖堂や学校などを管理する。フランス革命一周を祝う。『魔の城』 | 『一揆熱』（フランス革命に触発された民衆蜂起を阻止する目的で書かれた政治的パンフレット） |
| 1791年 | 『ベンヤミン・ノルトマンのアビシニアにおける啓蒙の物語 』 | 広報誌「報知」創刊、『人間の義務と権利についての講話』 |
| 1792年 | 『ヨーゼフ・フォン・ヴルムブラントの政治的信仰告白』（仏革命後の恐怖政治を批判）、『ブラウンシュヴァイクへの旅』 | |
| 1793年 | | 「報知」改め「皇帝勅許帝国報知」創刊。 |
| 1796年 | 『利己心と忘恩について』、死去。 | 「ドイツ新聞」改め「ドイツ国民新聞」創刊。 |
| 1798年 | | 『農民のための救難便覧第二巻』 |
| 1799年 | | 『ミルトハイム歌謡集』 |
| 1811年 | | ナポレオン軍によって逮捕される。「ドイツ国民新聞」は1813年まで発禁処分となる。 |
| 1814年 | | 『フランスによるルードルフ・ツァハリーアス・ベッカーの17ヶ月にわたる監禁、その苦しみと喜びの手記』 |
| 1822年 | | 死去。 |

# Kritische Bemerkungen gegen die Aufklärung und Intention der Nützlichkeit in A.F.v. Knigges „Über den Umgang mit Menschen“

## —— Im Vergleich zur Volksaufklärung von R.Z. Becker ——

Takefumi TAGUCHI

Adolph Freiherr von Knigge und Rudolph Zacharias Becker wurden im gleichen Jahr, 1752, geboren. Bemerkenswerterweise wurden auch ihre beiden Hauptwerke (Knigge: *Über den Umgang mit Menschen*, Becker: *Noth- und Hülfsbüchlein für Bauersleute*) zur selben Zeit, im Jahre 1788, veröffentlicht. Darüber hinaus stimmen ihre Anliegen in einigen wesentlichen Punkten überein: Bei ihren jeweiligen Hauptwerken handelt es sich erstens um die populärste Gebrauchsliteratur des 18. Jahrhunderts, welche dem Leser sachdienliche Lebensanleitungen und Ratschläge gibt. Zweitens sind sie vom Problembewusstsein motiviert, das sich gegen die damalig gegenwärtigen Zustände der schein-aufklärerischen Gesellschaft wendete. Drittens kritisierten beide Verfasser, sich selbst nicht als Gegner der Aufklärung, sondern als ihre Reformer begreifend, die Diskrepanz zwischen den Ideen der Bewegung und dem realen Verhalten bzw. den erlebten Umgangsformen einer Vielzahl der sogenannten Aufklärer ihrer Zeit. Das soll heißen, sie erhoben an die Aufklärer als gesellschaftliche Individuen bestimmte charakterliche Ansprüche, welche den Zweck und die Mittel der Aufklärung im Hinblick auf die Umgangsformen modifizieren sollten.

Knigge gehörte zum verarmten Adel. Er bemühte sich mehrmals vergeblich um eine Stelle am Hof. Gleichzeitig versuchte er seinen Reformentwurf zur Gesellschaft in verschiedenen Orden und Logen, darunter auch im radikalaufklärerischen ‹Illuminatenorden›, zu verwirklichen. Hier im ‹Illuminatenorden› spielte er zwar zeitweilig eine wichtige Rolle, aber der Geheimbund enttäuschte bald seine Erwartungen. Sowohl an den Höfen als auch im ‹Illuminatenorden› wurde er in von Neid und Missgunst geprägte zwischenmenschliche Beziehungen verwickelt, die ihn schließlich dazu bewogen, in seiner Schrift „Über den Umgang mit Menschen“ die eigenen bitteren Erfahrungen, die er mit unterschiedlichen Menschengruppen sowie in verschiedenen Lebenssituationen hatte machen müssen, zu verarbeiten. Er tadelte und prangerte hier besonders diejenigen Leute an, die sich oberflächlich raffiniert und sittlich verhielten, sich in Wirklichkeit aber eher egoistisch und autoritär benahmen. Seines Erachtens gehörten viele von den angeblichen Aufklärern zu dieser Kategorie.

Obwohl die meisten Forscher Knigge als einen Aufklärer bezeichnen, klingen seine Worte über die Aufklärung ziemlich zynisch und skeptisch. Er hatte ein unangenehmes Gefühl gegen die stereotypen Schlagwörter der Aufklärung, wie: „Rechte der Menschheit“, „Denkfreiheit“, „Weltbürgergeist“ usw., weil viele Epigonen damals diese Wörter als inhaltlose Modewörter unbesonnen benutzen, um entweder die Leute zu locken oder sich damit auf einfache Art ein größeres

Ansehen zu verschaffen. Seine Kritik richtete sich auch gegen die nüchterne sowie mitleidlose Denk- und Handlungsweise, die Knigge besonders bei den jüngeren Gebildeten beobachtete. Solches Benehmen schien ihm sehr bedenklich, da es, wie er annahm, die gesellschaftlich tradierten zwischenmenschlichen Beziehungsstrukturen leichtsinnig vernachlässigt, das Moralbewusstsein und die Achtung vor den Mitmenschen vermindert und am Ende sogar soziale Unruhen hervorrufen könne. —Knigge zweifelte nicht daran, dass, wenn die Doktrin und die Rationalität der Aufklärung vorbehaltlos und penibel durchgesetzt würden, diese die menschliche Gesellschaft und Gemeinschaft auf kurz oder lang zerstören würden. Sein Verdacht in Bezug auf die Schädlichkeit der Aufklärung wurde also nicht allein durch die in seinen Augen seichten und falschen Vertreter der Aufklärung hervorgerufen, sondern auch durch die kalte Sachlichkeit und die seiner Ansicht nach snobistische Selbstgerechtigkeit, welche der deutschen Aufklärung innewohnte.

Aus diesem Grund war Knigge der Aufklärung und insbesondere der Volksaufklärung gegenüber sehr vorsichtig eingestellt, die damals bereits in bestimmten bürgerlichen Schichten eine hohe Anerkennung und Zustimmung erlangt hatte. Er befürchtete, dass, wenn die Bauern aufgeklärt würden, ihr Unmut über ihre erzwungene Bedürftigkeit überschäumt, und sie von da an kein Interesse mehr haben würden, ihren beruflichen bzw. gesellschaftlichen Pflichten nachzukommen. Dennoch bekundet Knigge dabei aber sein aufrichtiges Mitleid mit den deutschen Bauern, die unter den harten Lebensumständen wie Sklaven leiden mussten. Er erhoffte, durch eine ihnen passend-praktische Aufklärung ihre Not erleichtern zu können. Dass Knigge in seinem Werk „Über den Umgang mit Menschen“ die sonst verachteten Bauern oder andere einfache Leute als Partner des Umgangs menschlich und würdig zu behandeln versuchte, beweist jedoch unbestritten seine wesendliche Zustimmung zur Idee der Volksaufklärung. Während er in diesem Werk meistens nur auf die negative Seite der Aufklärung hinweist, bringt er eine auffallend positive und freundliche Meinung zur Aufklärung der Unterschicht vor. Wenn man also Knigge zu den Aufklärern zählen möchte, so muss er in diesem Zusammenhang als volksaufklärerisch orientierter Reformaufklärer betrachtet werden.

Was Knigge für nötig hielt, war eine wahre Aufklärung, „welche uns lehrt, mit unsrer Lage zufrieden und in unsern Verhältnisse brauchbar, nützlich und zweckmäßig tätig zu sein.“ Diese Definition der wünschenswerten und nützlichen Aufklärung ist fast wortwörtlich identisch mit der von Becker. Er kritisierte eifrig das Anliegen der bisherigen Aufklärer, welche sich nicht selten auf die „Verfeinerung“ und die „Gelehrsamkeit“ beriefen, da diese seiner Meinung nach alleingenommen nichts mit der eigentlichen Aufklärung als solches zu tun habe. Desweiteren beanstandete er, dass jene Vertreter der Aufklärung die Tauglichkeit der Kenntnisse für das Alltagsleben völlig außer Acht ließen. Das Ziel der Bemühungen Beckers war, dass die Bürger die Bauern —unbedingt standesgemäß— aufklären und ihr Leben modernisieren sollten. Und dass somit dann gemeinsam mit den auf solche Weise aufgeklärten Bauern die gute Wirkung einer neuen

funktionellen Aufklärung unter allen Ständen in Deutschland verbreitet werden sollte.

Knigge und Becker hatten eine gemeinsame Absicht; mit ihrer „Intention der Nützlichkeit“ wollten sie, die zu einer pedantisch inhaltslosen Hülle zu verkommen drohende Aufklärung wieder aktivieren. Berücksichtigt man all dies, kann man nicht unbedingt von Zufall sprechen, dass gerade zum Ende des Aufklärungszeitalters diese sogenannte Gebrauchsliteratur der beiden Autoren fast zeitgleich geschrieben und veröffentlicht wurde.